

# 汐風を食べてみませんか。

山の恵みが汐風とともに、海の恵みとなってやってきた

## 民泊で思い出を綴ろう

今年も、仙台市の吉成中学校を皮切りに、県内各地から、ぞくぞくと元気な子どもたちが南三陸の様々な魅力を求めて町を訪れています。

ファームスティ推進協議会やグリーン&ブルーツーリズム推進協議会が受け入れるこの活動は、「南三陸の暮らし」をキーワードに、海から里、山に至るまでの様々な体験と地元の方々との交流が魅力で、中でも「民泊」については、対面する瞬間こそ誰も

が緊張の面持ちですが、1泊という時間の中で確実に気持ちが通い合い、民泊家庭の皆さんと別れを惜しむ姿は、本当に印象的です。また、子どもを送り出したおうちの方々からは、「この体験を通して大きく成長した！」など、驚きと喜びの声が多く寄せられています。

今回はこの民泊家庭での様子を取材してきましたのでお知らせします！



はじめて出会うときは、誰でも緊張するもの…ですが、南三陸のお父さん、お母さんは違います！そんな緊張をあっという間に解きほぐすような温かい笑顔と心で迎えます。

民泊での夕食は、子どもたちとの共同作業！家では塾や部活が忙しくて、夕飯の準備はやったことがない！という子どもも、裏の畑で自分たちで収穫した野菜を調理する姿はイキイキとしていました。



こちら阿部さんのお宅では、奥様の得意料理「米粉ピザ」に子どもたちが挑戦！「ピザって家で作れるの？」「すご〜くいい匂いにお腹が鳴るよ〜」なんて、まるで家族のように和気あいあいと！みんないい笑顔です^^



1泊という短い時間にもかかわらず、やっぱりお別れのときは寂しいものです。お父さん、お母さんだけでなく、可愛い家族ともすっかり仲良し！「また遊びに来てもいいですか？」「もちろん！またごさいん！」なんて会話が飛び交っていました。



袋原中学校の約140名の生徒さんは、なんと全員で田束山に登山をしました！振り返ると、登山道には中学生の長い列！弱音を吐くことも無く、全員最後まで登りきりました！山頂では素晴らしい景色を楽しんだり、今の気持ちや目に見えるものをテーマとした短歌作成の時間が設けられるなど、中学生らしい時間を過ごしました。



南三陸時間旅行サポートセンターでは、このように教育旅行の一環として町を訪れる小学生（高学年）・中学生を対象に、ご自宅で宿泊の受け入れをしてくださるご家族を随時募集しています。地域の皆さんも、民泊の受け入れを通して未来を担う子どもたちとの心温まる出会いを体験してみませんか？詳しくは、サポートセンターまで問い合わせください。

## 庄内の風 35

友好町の山形県庄内町を紹介する情報コーナー

### 今宵、疾風怒濤の「夏宵まつり」

庄内町の真夏の恒例イベント「夏宵まつり」は毎年8月12日に行われ、今年で8回目を迎えます。

その昔、余目地区深川集落の金沼に巨大な龍が棲んでいたと言われる「余目飛龍伝説」。この伝説をモチーフに作り上げたオリジナルの「飛龍囃子」にあわせ、15チーム、総勢500名の踊り手がこれまたオリジナルの振り付けと景気のいい掛け声とともに町中心商店街を踊りくねる町民参加型のまつりです。最も輝いていたチームには「夏宵大賞」の称号とともに、伝説の真っ赤な長半纏が贈られます。各チームの華麗な踊りはもちろんのこと、全長20メートル、高さ3メートルの巨大な龍の舞やド派手な装飾を施した大山車は迫力満点で見ものです。

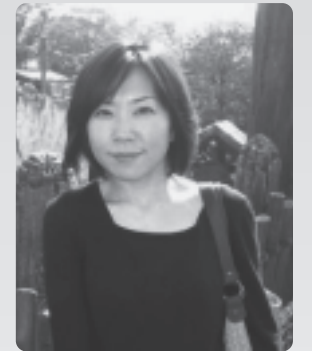


### 夢大使 リレー通信 37

各地で活躍する南三陸町夢大使の皆さんの声をお届けする「夢大使リレー通信」を連載しています。今回は、「牡蠣ツアー」主催者の遠藤恭子さんです。

### 自意識過剰

夢大使 遠藤 恭子 さん (東京都)



毎年、この時期になると、考え始める。

「今年の牡蠣ツアー、どうしようかなあ」

まずは、一緒にやってくれる幹事さんを決めて、第1回目の打ち合わせの日取りを決めて、テーマを決めて、募集の手配うんぬかんぬん。上京してからずっと、毎年これを繰り返していたのだけど、今年の「どうしようかなあ」は今までは少し違っていた。

「やるかな、辞めようかな」

5年の歳月とともに、夜遅くまで準備をする体力が落ちてきたこともさることながら、一体全体「牡蠣ツアーってなんだっけ？」という問いに自分で答えられなくなってきていたからだ。そして昨年、自分の中では、完全なる不完全燃焼の想いが残ったことが腰を重くし、その想いがどこからくるのか、わからないまま半年が過ぎた。

長く同じことを続けていると、いろんな欲が出てくる。たくさんの人

を呼ぶ仕組みを作るには？もっと故郷をアピールするには？などなど。夢大使とはいえ、町おこしってなんなのかも知らない素人の私が、大きなおきな目標掲げることを試みて、人を動かそうと躍起になっていた。うまくいったことも、うまくいかないこともたくさんあって、ぐるぐるぐるぐる。そうして自分の心の芯のようなものがわからなくなっていき、疲れていたのだ。

疲れ始めて、しばらくたって、あほらしい、と思った。

何人呼んだ。何回ツアーをした。いくら経済効果があった。そんな数値化できることを誰が望んでいると私に言っただろう？そして私自身だって、最初の想いはそんなところになかったはずだ。

両親が営む漁業のいろんな側面を、第1次産業に縁がない人たちに知ってほしい、一見わずらわしく見える土着の人付き合いの中にある豊かさを共有したい。「何もない」と捉えているものを「だからいい」と感じ

てもらえる機会を作りたい。そんなシンプルなことを伝える場を持ちたい。それが最初の理由だったはずで、そしてやはり今でも本当に望むものはそこにある。

なーんだ、自分で架空のプレッシャーをかけていただけじゃない。私ってばどれだけ自意識過剰なんだ！たくさんの方が笑顔で言ってくれた「また行きたい」「次回も関わりたい」をプレッシャーに感じていたなんて、なんてもったいないことを！

そう思ったとき、ふと肩の力が、抜けた。

もっと、もっと、は余裕のあるときに求めればいい。それ以上のことは、誰か得意な人がやってくれればいい。私は、楽しむこと、そして自分の人生においても大切にしている「伝えたい、感じてほしい思いをカタチあるものとして創り上げること」これだけを見て、無理をせずに続けていくことにする。

ご協力いただいている皆様、これからもどうぞ宜しくお願いします。